

## 河畔にて

ふたたび芸備線の沿線に住むことになった。一月二十一日、大勢の若い人たちの助力を得、折  
りから好天にも恵まれて、つつがなく転居を完了した。人の好意に加えて天の恵沢にもあずかっ  
たわけで、幸せな思いをした。

こんど越した所は、広島駅から三つ目の安芸矢口駅の近くであるが、六年前まで住んでいた家  
は、おなじ芸備線の、さらに二つさきの下深川駅から徒歩で十分の所にあった。その家から広島  
市南千田町の、ついこのあいだまで住んでいた借家に移った時、何よりも新居が川土手に近いこ  
とが、私を喜ばせた。三百メートル以上にもひろがった元安川の河口を通して、正面に向宇品の  
山が見え、そのうしろには、右に似島、左に江田島の山々が重なっていた。夕方になると、宇品  
の港町の灯が波に映え、季節を問わずそれは美しかった。私は川沿いの道を散歩するとき、京橋  
川と元安川の二つの河口に挟まれた突堤に歩を止めて、灯火の映える宇品の海に見入るのが常で

あった。

太田川の支流の三篠川が、山峡の岩根を洗うように流れる山村から、同じ流れが本流に合し、やがていくつかに分かれる川筋の一本が海へ注ぐあたりに居を占めるようになった時、私は一片の感慨なきをえなかった。川につながる想念が、一種の宿命的な意味をもって、この時ほど強く私をとらえたことはなかった。

明治三十六年六月六日、私は熊本県球磨川の支流川辺川のほとりの五木村に生まれた。その自然や人家のたたずまいなど、何一つまとまった映像がよみがえっては来ないが、不思議に豪宕たる激流の音だけは、いまま私の胸の底に高鳴っている。この内部の音に耳を傾けている時が、私自身にもっとも安定した感覚をとりもどしうる時である。そしてこの音が、私の生のリズムの基調となり、私の思考と行為を知らず知らずのうちに規定していることに思い当たることがある。川につながる想念が私に宿命的なものであるといったのは、このことであつた。

私は、私の晩年の住居を定める個所が、もし希望どおりになるならば、低い山の木立を背にして、前面に夕空を映す川面を見わたすことができ、耳をすませば流れの音がはっきりと聞えてくる、そういう所に住みたいと思っている。

こんどの家にいつまで住むことになるか、借家住みの身で、いずれは立ち退きを迫られる日があるにちがいない。しかし、書齋にきめた二階の一室の南向きの窓をあけると、右手に見える竹

藪のあいだから、川瀬の波の動きがはっきりと見え、それにつれてゴォッという音が私の耳に伝わってくる。私はこの書斎で古典を読み、物を考える静かな時間を持ちうるようになった現在に満足せねばなるまい。

(昭和三十七年二月)